

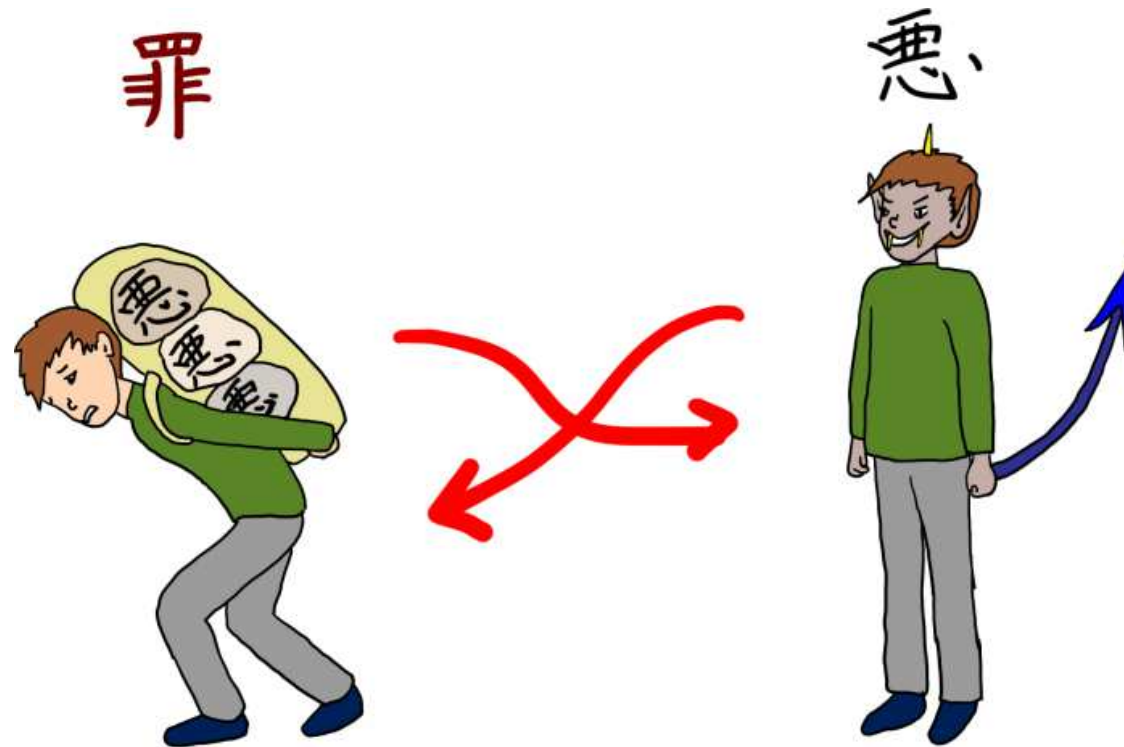
悪と罪の役割分担



東郷 潤

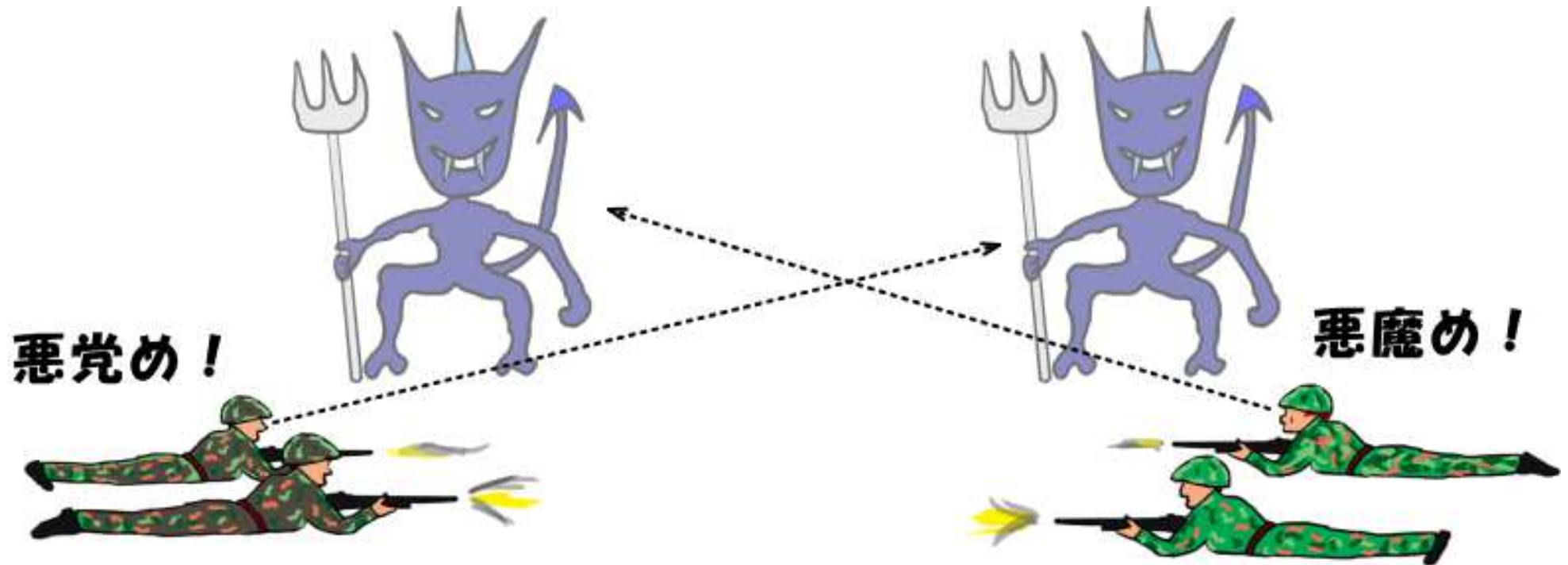
悪と罪のイメージには、どんな関係性があるのでしょうか？

哲学的・本質的な話ではなく、言葉のイメージが人間心理に与える影響の話です。



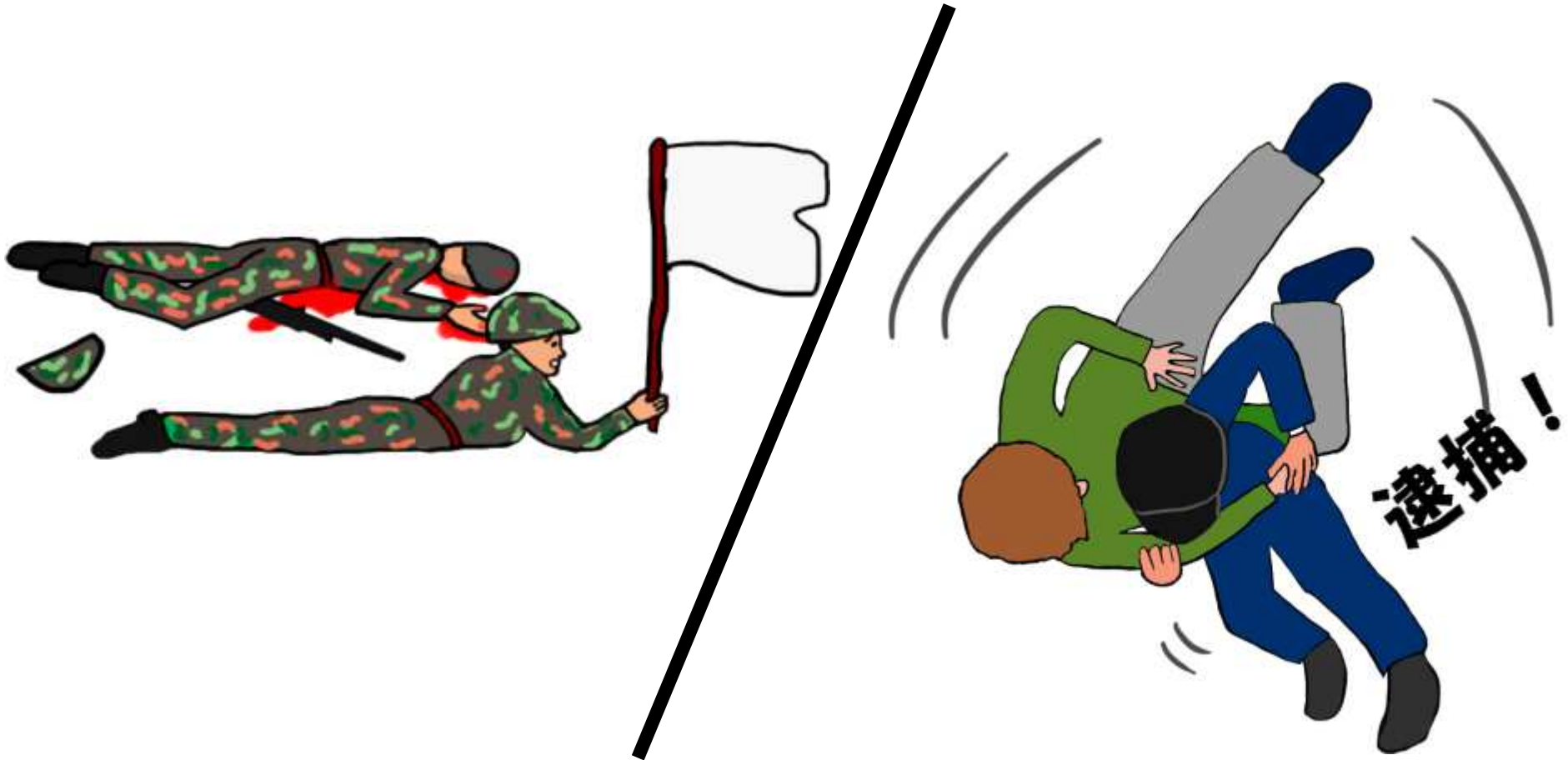
これは厳密な話でもありません。悪と罪は、ほとんど同じ意味で使われることもあるのですから。

悪のイメージは、敵という言葉と対応していそうです。それぞれの価値観に従って、敵同士が互いを悪とみなすって、ありふれたことですよ。



敵同士の関係は対立です。強い・弱いはあるけど、それは上下関係ではありません。

さて勝敗の決着がつけば、戦いは終わります。それが国と国でも警察(社会)と犯罪者(社会の敵)でも、普通、強い方が勝つでしょう。



戦いの終わりは、すなわち対立の終わりです。

そして敗者は勝者に従いますね。



両者の関係は、対立から上下(支配)関係へと変わっています。¹

¹注 対立が上下関係に変化するといっても、そこにはいろんな段階があるでしょう。心の底から恐れ入ることもあるでしょうし、面従腹背ということもあります。力関係が変われば、上下関係が対立へと変わることもあります。

勝者は敗者を裁きます²。これは、**罪**を決めるとも言えますね。

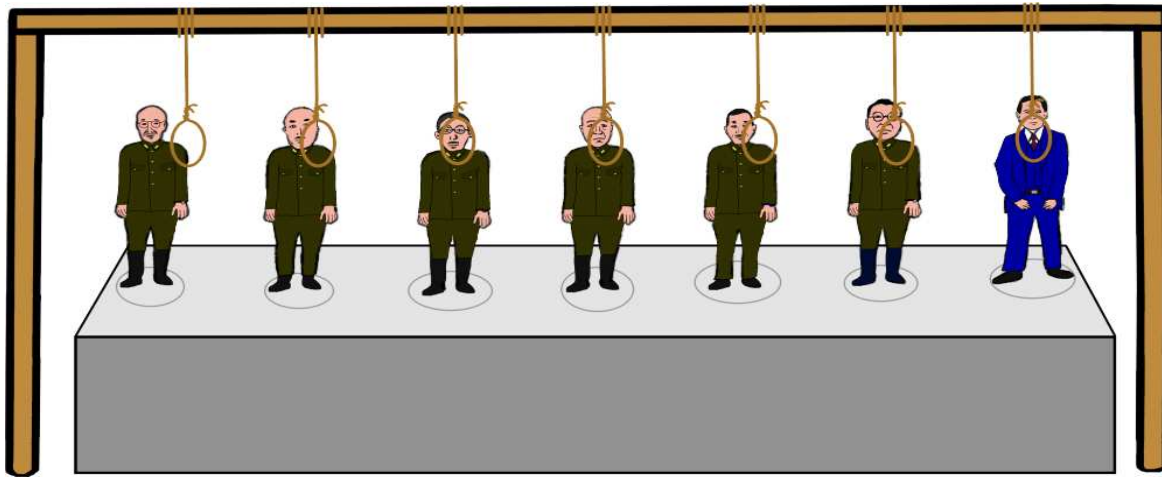


敗者を敗者の価値観・法律・ルールで裁くことは、普通ありません。敗者の価値観は、負けた時点で強制終了となっています。³

²どんな文化でも誰でも必ず勝者が敗者を裁くということではありません。裁くであろう、文化／錯覚がテーマです。例：水師營の会見

³敗者の心の中なりに抑圧されるということです。参照絵本：罰は闇を生む

そして勝者が決めた**罪**に応じて、敗者は様々な**罰**を受けることとなります。



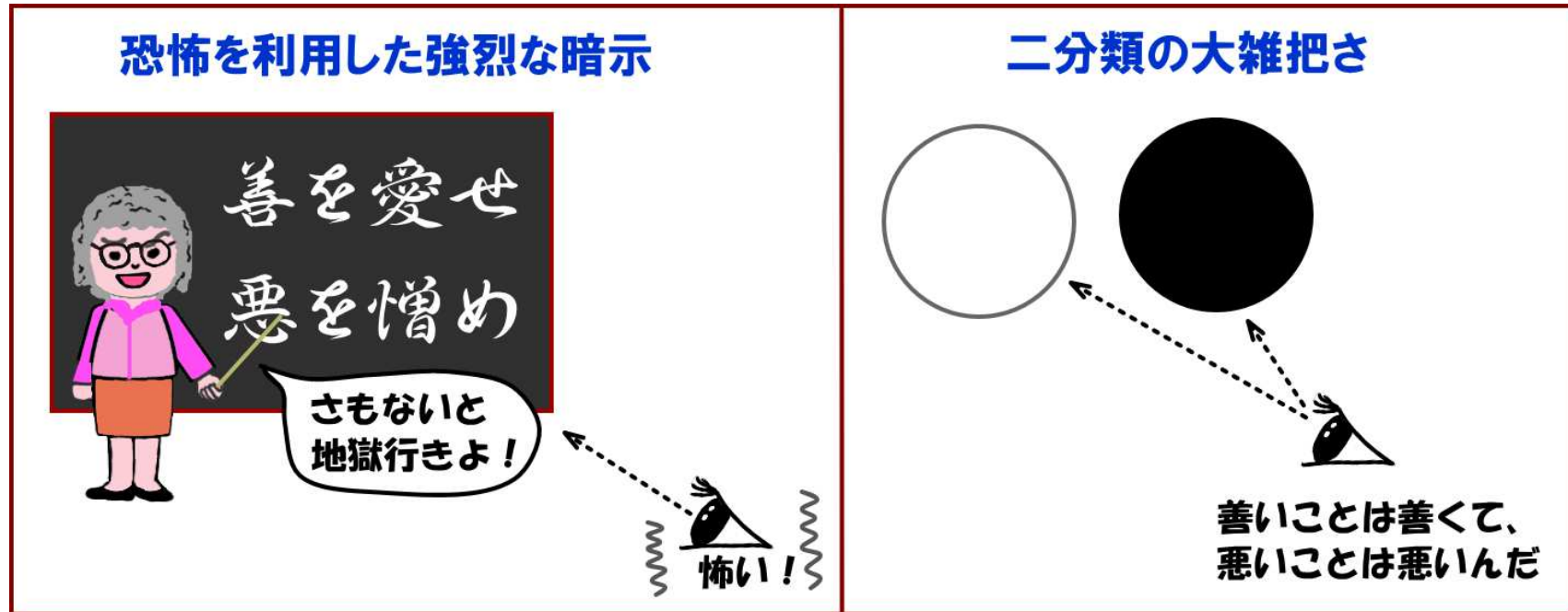
ではここで悪と**罪**の攻撃を、ざっと比較してみましょう。これも厳密な話ではなく、それぞれの言葉には、こんな傾向があるだろう、という話です。

	悪	罪
攻撃対象への認識	悪・敵	罪・罪人
攻撃対象との関係	対立関係	上下（支配）関係
攻撃の方向	双方向	一方向
攻撃の性格	戦い	罰
攻撃の条件・制限	無制限・無条件の傾向 ⁴	有り

罪への**罰**は、悪への攻撃より抑制的に見えます。負けそうな側が敵に降伏・服従し、あるいは**罪**を告白するのは、攻撃の抑制を期待してのことでしょう。

⁴ 参照絵本；攻撃命令無制限

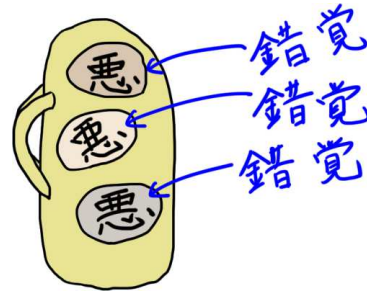
次に悪と**罪**の錯覚生成を比較してみます。人は善悪の錯覚を、主に条件付け（暗示）と二分類の特徴である大雑把さの組み合わせから作り出すようです。



一方で**罪**という言葉に、人は二分類の性質を強く持たせてはいません。⁵

⁵「善」と「悪」という二つの言葉は、「善悪」という一つの言葉になるほど強く結びついていますが、「有罪」「無罪」は、そこまで強く結びついてはいません。とはいえこれも、厳密な話ではありません。また「罪は罰するもの」という条件付けは存在するでしょう。なお善悪の錯覚については、平和の絵本のWEBで繰り返し取り上げていますので、ご参照ください。

つまり人は、**罪**という言葉には「善悪」が持つほどの錯覚生成力を持たせてはならず、持たせているのは錯覚の縮小・保存力だと想像できます。



悪なる敵が罪人へと変化するのに合わせて、あたかも悪が人間から分離され**罪**というリュックへ入るようなイメージを作っているのかもしれないね。



人間を攻撃することには普通、抵抗感がありますが、戦いに際して敵を悪だとイメージすれば抵抗感が減ります。それは戦いに勝つ可能性を大いに高めます。



しかし勝敗が付けば、高い攻撃性は不要です。そこで悪から**罪**へイメージを変化させ攻撃性を抑制し、かつての敵を社会秩序（の最下層）へ組み込みます。

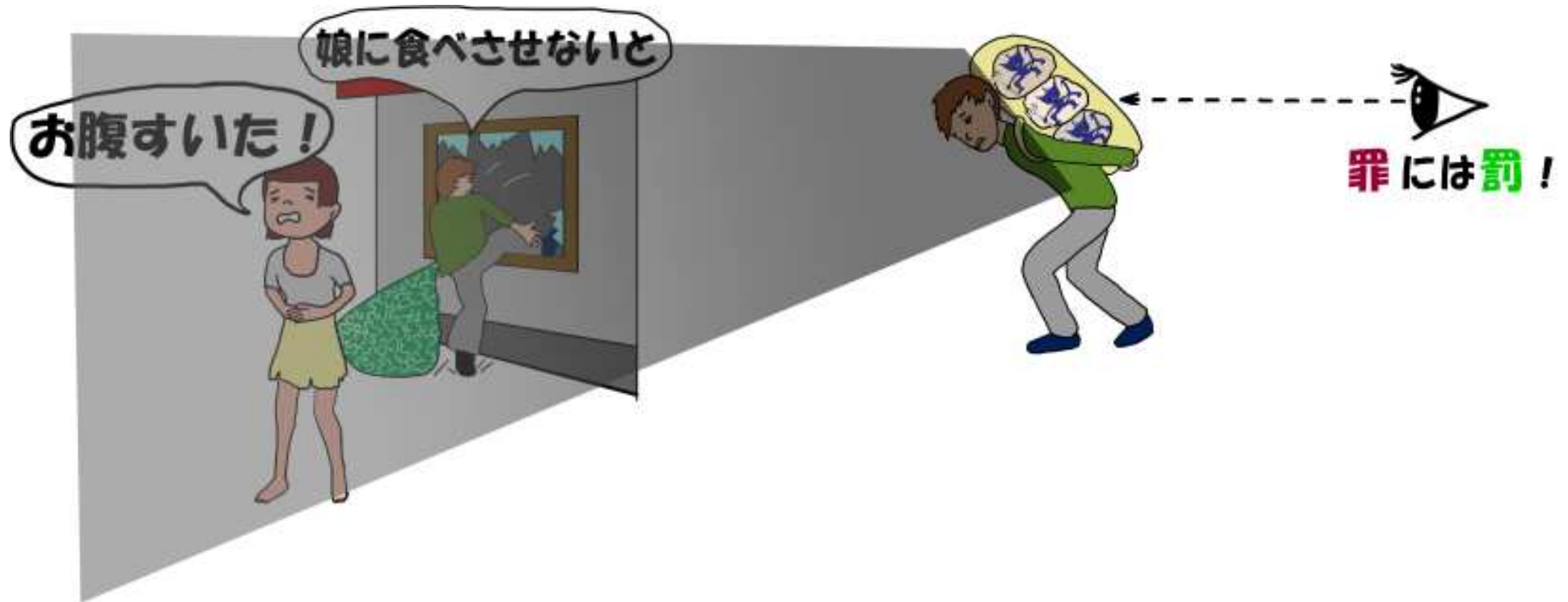


罪に沿った**罰**を受けさせ、**罪**を償ったと評価し許したなら、かつての悪なる敵を仲間（社会の一員）として受け入れることすらあるのです。



このように、悪と**罪**のイメージを使い分けることで、多くの人々が他者への攻撃性を調整していると想像できます。

とはいえ悪の錯覚を**罪**のイメージの中に、いわば二重に閉じ込めてしまえば、人々が自ら作り出した錯覚に気づくことは、とても難しくなるでしょう。



これでは根本的な問題解決（なぜ敵となったか／戦争・犯罪の原因・予防など）のチャンスを半永久的に失ってしまいます。

弱者の価値観・ルールを戦いで強制終了。 強者の価値観・ルールを罰で強制。

・・・これって、強者が弱者を力と恐怖で支配することに他なりません。

**善悪と罪の錯覚に役割を分担させ、
力と恐怖による支配を
生み・隠し・育ててはいませんか？**



あとがき

もし、あなたがこの絵本に共感されたなら、出来るだけ多くの方に、読ませてあげていただければと思います。

本絵本は、自由にコピーして下さって結構です（商業出版はじめ金銭的な授受を伴う場合を除きます）。また下記WEBからは、東郷潤の他の絵本やメッセージをダウンロードすることができます。

www.j15.org

©Jun Togo 2017